

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K22344

研究課題名（和文）食選択の二元論モデルの開発

研究課題名（英文）Development of Dualism Model for Food Choice

研究代表者

中嶋 康博（Nakashima, Yasuhiro）

東京大学・大学院農学生命科学研究科（農学部）・教授

研究者番号：50202213

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,600,000円

研究成果の概要（和文）：日常生活な食事のあり方は戦後大きく変容し、社会の成熟化によって時間の機会費用が上昇するのにもない、全般的に食の外部化・簡便化が進んできた。現代の食選択の背景には、食材の吟味、調達や調理のための手間、食事摂取に費やす時間といった要因が複雑に影響を与えている。本研究では、食事の準備に「手間をかける」「楽しむ」という人や場面が存在することを踏まえ、「生きるための食」（A食）と「楽しむための食」（B食）という2つの視角を設定し、大規模WEB調査を実施し、食事の場面に現れる人々の態度や認識を、「食の価値（food value）」の観点から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

消費者の日常的な食行動や食品企業の商品戦略などで観察される、食品の安価志向やブランドの乱立などの定型化された状況を解明するため、「生きるための食」（A食）と「楽しむための食」（B食）という視角から食選択が二元論的に行われるという新たなモデルを検討した。その概念枠組みの下で「食の価値」視点に基づきながら、食行動をめぐる態度や認識に関して多角的な評価を行った。このモデルは、食品分野のマーケティング手法、食を利用した地域振興のあり方、公的に支援すべき食の対象の明確化といった政策論に新たな知見を提供することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Our daily dietary pattern has changed dramatically since the end of World War II, and as the opportunity cost of time has risen with the maturation of society, the phenomenon of externalization and simplification in eating has developed in general. Factors such as the selection of ingredients, the time and effort required to procure and prepare them, and the amount of time spent on meal consumption have had a complex influence on contemporary food choices. In this study, based on the existence of people who "take time and effort" and "enjoy" for meal preparation, two perspectives, "food for living" (food A) and "food for enjoying" (food B), were set, and large-scale Web surveys were conducted to study people's attitudes and perceptions that appear in each meal situation from an analytical concept of food value.

研究分野：農業経済学

キーワード：食選択 外部化 簡便化 食の価値 WEBアンケート Best-Worst Scaling

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

食品は、あらためて他の消費財と比べてみると、必ずしも教科書で記述されるような単純な選択モデルが当てはまらないことに気づく。対象となる品目数の多さと購買頻度の高さのために、日常生活の中でじっくり検討することは難しい。たとえばスーパーでの購入時にあれこれ迷い吟味するのはせいぜい夕食のメインの食材くらいで、多くの場合は定番商品を選んだり安売り商品を即断即決で買ったりしている。

概して人々は食品に安さを求めがちだが、その志向の背景にはこのような選択上の慣行や戦略があるのではないかと推察される。高い商品を買ってしまった場合、必然的に他の商品の購買計画を変更しなければならないが、食品の購買は頻度が高いので、そのたびごとに思い悩むことは心理的に大きな負担となるだろう。しかし安い商品ならば予算制約を超えることはないため、消費選択を全面的に見直す必要はなく、安心して購入を決断できるはずである。

このような事情もあって、消費者に選択され易くするため、食品は安売り競争に陥りやすい。それを避けるため差別化や付加価値化を目指して、農業界は新品種の改良を、食品業界は新製品の開発に励むことになるが、成功するものは少なく、成功しても商品寿命の短いものが多い。すぐに飽きられることが多いのも食品の特徴だが、それ故にかえって新製品が次々に生み出されるという面もある。

日本農業の振興のために、需要に応じた生産の必要性が主張されているが、そのために消費者の志向を検討しても意識の表面的な分析にとどまってしまう恐れがある。そこで食選択の二元論という視角から消費者の食選択の行動分析を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、食品をめぐる多様な消費・購買行動を分析するためのモデルを開発することにある。研究開始当初の背景で述べたような定型化された状況を説明するため、食選択が二元論的に行われるというモデルを検討する。そこでの仮説は、食には「生きるための食」(A食)と「楽しむための食」(B食)の2種類の食があるというものである。

A食とB食の本質的違いを明確に説明することが求められる。たとえばA食では準備(購入や調理)に苦痛や不効用を感じるものだが、B食では準備がかえって快楽や効用をもたらす。またA食の多くは家庭で出される料理だが私たちはそれを比較的辛抱強く食べ続けて飽きることはあまりないが、B食ではあえて移り気な食選択をしがちである。

この2つの食の区分は、かつて生源寺(2009)が食料安全保障の文脈で行った論考、すなわち食を「絶対的な必需品」と「高度に選択的な財」に分類するアプローチを踏まえた上で、操作可能な分析的定義を与えたものである。ここでの論考が、マーケティング分野にも一定のインプリケーションを提供したり、食を利用した地域振興のあり方、公的に支援すべき食の対象の明確化といった政策論に貢献したりすることが期待される。

3. 研究の方法

日常生活を送るために必要な栄養は、通常、一日に数回の食事から摂取される。その食事をどのようにとるのかにおいて、内食・中食・外食などの選択があるが、その背景には食材の吟味や選択、調達や調理のための手間、食事摂取に費やす時間といった要因が複雑に影響を与えている。社会の成熟化によって時間の機会費用が上昇するのにもとない、全般的に食の外部化・簡便化が進んできたことをここ数十年の統計を用いて改めて確認した。

現実には、あえて手間のかかる料理を作ったり、時間をかけて食事を楽しんだりする人々も存在する。本研究では、日本においても食事の準備に「手間をかける」「楽しむ」という人や場面が存在することを踏まえ、「生きるための食」(A食)と「楽しむための食」(B食)という2つの視角を設定し、大規模アンケート調査をもとに、食事の場面ごとに現れる人々の態度や認識を、「食の価値(food value)」の観点から明らかにした。

WEB調査は3回(2020年1月、2020年11月、2023年3月)実施した。2020年1月のWEBアンケート調査では、50,000名(ただし埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県在住の20代から70代の男女、年齢人口比で割り付け)を対象としたA調査、その回答者からランダムに回答を求めた726名に対するB調査を行った。

2020年11月のWEBアンケート調査では、50,000名(北海道と沖縄県以外のすべての都府県在住者を対象に、「東北・関東・静岡・甲信越」「近畿・北陸・東海」「中国・四国・九州」の地理的区分での20代から70代の男女別・年齢別の人口比で回答数を割り付けた)を対象としたスクリーニング調査、その回答者からランダムに回答を求めた1,043名に対する本調査を行った。

2023年3月のWEBアンケート調査では、4,140名(すべての都道府県在住者を対象に、「北海道・東北・関東・静岡・甲信越」「近畿・北陸・東海」「中国・四国・九州・沖縄」の地理的区分での20代から70代の男女別・年齢別の人口比で回答数を割り付けた)を対象とした。なお、

2023年3月の調査の分析結果はまだ論文として公表されていないので、以下の研究成果の説明には含めていない。

4. 研究成果

(1) 食事準備行動の多様性 (安部他、2021)

日本においても食事の準備に「手間をかける」「楽しむ」人々や場面も存在することをWEBアンケート調査の結果から示し、そうした行動の多様性を生み出す要因を、食に対する価値観である food values (食の価値) や食習慣、デモグラフィックな特徴などの観点から分析することとした。

50,000名(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県在住の20~70代の男女、年齢人口比で割り付け)を対象に行ったA調査と、その回答者から無作為に抽出した726名に対するB調査で分析データを取得した。A調査では食事の準備への手間のかけ方や意識、食習慣など、B調査では12項目の食の価値を質問した。食の価値については、自然さ/安全性/環境への影響/産地/公平さ/栄養価/風味/見栄え/利便性/価格/動物福祉/目新しさという12項目を比較したBazzani et al. (2018)の手法を利用して相対的な重要度の違いをbest-worst scaling (Finn and Louviere, 1992; 以下BW)形式で問うた。A調査において質問した「平日/休日」×「朝食/昼食/夕食」の6場面ごとの「食事の準備(食材購入や調理)にかける手間」への回答を対象に、クラスター分析を行った。非類似度として順序変数でも算出可能なgower距離を用い、クラスターの階層構造を前提としないkmedoids法を採用する。クラスター数は、平均シルエット値が最大となるものを選択した。

B調査のデータに基づき、12項目の食の価値に対するBWスコア(合崎, 2017)をクラスターごとに算出して、食の価値に対する認識を比較検討する。BWスコアは以下のように算出する。まず各参加者について、12個の選択肢集合ごとに「最も重要なもの」とされた項目に1点、「最も重要でないもの」とされた項目に-1点、どちらにも選ばれなかった項目に0点を付与する。全項目について得点の和を算出し、それを個人のスコアとする。項目ごとに、全体あるいは各クラスター内で個人のスコアの平均得点を算出し、それをBWスコアとする。全項目が4回ずつ選択肢集合に出現するので、BWスコアは-4以上4以下となる。このスコアが正の値であれば、「最も重要なもの」として選択された回数が「最も重要でないもの」と選択された回数を上回っている。さらにスコアが大きいほどその回数の差が大きく、相対的重要度が高いことを意味する。

A調査の結果をもとに「食事の準備にかける手間」についてクラスター分析を実施した結果、4つのクラスターが見いだされた。すなわち、「全ての場面で楽しんだり手間をかけたりする(C1)」「朝食は簡便に済ませ、夕食でのみ楽しむ(C2)」「全場面において、どちらかというように簡単に済ませることが多い(C3)」「全場面で手間をかけずに簡単に済ませる(C4)」である。簡便化を指向する層(C3, C4)が過半数を占めるが、食事準備にあえて手間をかけたり楽しんだりする人や場面の存在が示唆される。食事の準備に手間をかける人の割合は、クラスターごとに傾向の強さに違いはあるものの、全体的に平日よりも休日、朝食・昼食よりも夕食で大きかった。

B調査から算出されたBWスコアをもとにして、見いだされたクラスターごとの食の価値の相対的評価を行った(表1)。

食事準備行動の特徴が異なるグループごとにみて、BWスコアによって得られた食の価値の相対的な重要度からは、食事の準備を楽しんだり手間をかけたりする層では、価格や利便性といった項目よりも、環境への影響や自然さなど、食の価値の中でも副次的な項目に対して相対的に高い評価を与えていることが明らかになった。一方で、食事準備を簡便に済ませる層では、価格が栄養価よりも重要視され、利便性も他の層より相対的に高く評価されるなど、行動と価値観との間の関係が見出された。価値観に関しては、子供の頃の経験や準備の楽しさといった要素が手間をかけて楽しむ層となるべく簡便に済ませようとする層との間に差を生み出していたことから、

表1 食の価値に対する相対的評価

順位	全体 (481名)	C1 (104名)	C2 (93名)	C3 (179名)	C4 (105名)
1	安全性 (2.64)	安全性 (2.88)	安全性 (2.75)	安全性 (2.72)	安全性 (2.16)
2	栄養価 (1.26)	栄養価 (1.33)	栄養価 (1.37)	栄養価 (1.32)	価格 (1.29)
3	風味 (1.04)	風味 (0.93)	風味 (1.32)	風味 (0.92)	風味 (1.08)
4	産地 (0.55)	産地 (0.79)	価格 (0.74)	産地 (0.50)	栄養価 (0.99)
5	価格 (0.49)	自然さ (0.36)	産地 (0.69)	価格・自然さ (0.34)	産地 (0.29)
6	自然さ (0.29)	環境への影響 (-0.03)	自然さ (0.52)	-	利便性 (-0.05)
7	利便性 (-0.35)	価格 (-0.29)	利便性 (-0.33)	利便性 (-0.35)	自然さ (-0.06)
8	環境への影響 (-0.43)	利便性 (-0.69)	環境への影響 (-0.51)	環境への影響 (-0.54)	見栄え (-0.46)
9	見栄え (-0.77)	見栄え (-0.83)	見栄え (-0.92)	見栄え (-0.84)	環境への影響 (-0.58)
10	動物福祉 (-1.37)	動物福祉 (-1.21)	動物福祉 (-1.62)	公平さ (-1.17)	動物福祉 (-1.38)
11	公平さ (-1.43)	公平さ (-1.50)	公平さ (-1.81)	動物福祉 (-1.31)	公平さ (-1.49)
12	目新しさ (-1.91)	目新しさ (-1.73)	目新しさ (-2.19)	目新しさ (-1.94)	目新しさ (-1.79)

出所) B調査の結果から合崎(2017)に基づき算出したBWスコアをもとに作成。

1) 括弧内の数値はBWスコアである。

過去の経験、特に若年時の食に関する経験が、食事準備行動の多様性をもたらす要因の一つになっていると考えられた。

以上のことから、一般に観察される食の簡便化の傾向とは逆行するような食事の準備を楽しんだり手間をかけたりする行動が起きている背景には、食の価値に対する評価や経済的環境および食事環境に相違のあることが明らかにされた。また、食事準備を楽しんだり手間をかけたりすることには、消費者が環境への影響を始めとする食事摂取のさまざまな側面に目を向ける意図のあることが示唆された。

(2) COVID-19 パンデミック下における食の価値の変化 (村上他、2021)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によるパンデミックの発生時には、「新しい生活様式」として日本国内に様々な面で人々の暮らし方に大きな影響が与えられると予想された。パンデミック時に食品消費行動へ与えた経済的インパクトは大きいものの、パンデミックが解消に向かう中で元に戻っていくことは間違いない。他方、その中で生じた生活の変化やそれに伴う知識の獲得や考え方の変化による影響は長期的にも残存していく可能性も指摘されてきた。パンデミック時の食品消費行動に対する長期的な影響を考察するには、実際の購買行動の変化だけでなく、消費行動の背景となる考え方の変化に注目する必要がある。そこで、本分析ではパンデミック時の消費者の食品に求める価値に対する考え方の変化を Lusk and Briggeman (2009)、Bazzani et al. (2018) などによるオブジェクト型 (Case1) のベストワーストスケール (以下 BWS とのみ記載) を用いた Food Values に対する選好の計測を用いて明らかにすることとした。

本分析では特定の食品ではなく食全般に対する消費者の食品に求める価値に対する考え方を把握する方法として、Food Values の計測法を用いた。Lusk and Briggeman(2009)は、BWS 形式の質問で食品の購買にあたって重要視する value と重要視しない value を選択させることで相対的な各 value の重要性を計測する方法を提示している。BWS 形式での選択結果から選択されたベストとワーストの組み合わせを相対的な重要性の差が最大になる組み合わせと考え、選択される確率を多項ロジットモデル (MNL) によって推定することができる。そのパラメータから項目ごとに最も相対的重要性が高い項目である確率として Share of preference (SP) を得

表 2 調査回ごとのクラスター別 SP の平均値と標準偏差

第1回 2020年1月 人数	クラスター1 81(22.4%)		クラスター2 30(8.3%)		クラスター3 66(18.2%)		クラスター4 28(7.7%)		クラスター5 57(15.7%)		クラスター6 100(27.6%)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
自然さ	7.99%	6.74%	5.34%	6.63%	1.99%	1.52%	2.58%	1.47%	4.41%	3.85%	1.84%	1.55%
安全性	21.79%	11.87%	15.50%	8.66%	12.59%	7.90%	47.13%	7.08%	58.78%	7.81%	79.40%	7.00%
環境への影響	3.73%	2.09%	2.79%	1.88%	1.38%	0.97%	1.62%	0.99%	1.97%	1.27%	1.00%	0.56%
産地	10.37%	8.24%	4.88%	5.25%	2.42%	2.18%	4.75%	3.74%	6.62%	6.85%	2.52%	2.24%
公平さ	2.61%	2.22%	2.02%	2.25%	0.76%	0.56%	0.84%	0.71%	1.35%	1.19%	0.49%	0.40%
栄養価	18.33%	11.49%	12.00%	6.39%	7.35%	4.44%	13.94%	8.31%	6.99%	4.45%	4.57%	3.29%
風味	14.07%	9.94%	15.84%	9.03%	5.72%	4.19%	5.40%	3.48%	9.55%	5.50%	3.42%	2.14%
利便性	4.87%	4.65%	3.86%	2.90%	3.25%	3.21%	2.33%	2.75%	2.06%	2.07%	1.10%	1.21%
見栄え	6.15%	7.27%	5.26%	3.29%	2.63%	3.08%	1.47%	1.22%	1.95%	1.50%	1.45%	2.16%
価格	6.65%	4.91%	30.14%	5.45%	60.68%	10.62%	18.57%	10.10%	4.72%	4.39%	3.43%	3.88%
動物福祉	2.06%	1.33%	1.29%	0.85%	0.69%	0.43%	0.78%	0.43%	0.94%	0.56%	0.45%	0.28%
目新しさ	1.38%	0.61%	1.09%	0.58%	0.54%	0.27%	0.58%	0.23%	0.66%	0.21%	0.33%	0.15%
第2回 2020年11月 人数	クラスター1 43(16.0%)		クラスター2 30(11.2%)		クラスター3 16(6.0%)		クラスター4 64(23.9%)		クラスター5 89(33.2%)		クラスター6 26(9.7%)	
自然さ	6.53%	4.46%	3.55%	2.57%	1.93%	1.09%	6.92%	5.64%	4.87%	3.46%	2.31%	1.13%
安全性	17.34%	9.59%	14.76%	6.35%	9.65%	5.58%	24.33%	8.42%	51.88%	7.88%	73.29%	4.98%
環境への影響	3.83%	1.90%	2.46%	0.96%	1.65%	0.95%	3.96%	1.89%	2.63%	1.25%	1.63%	0.95%
産地	6.61%	4.22%	4.70%	5.17%	1.53%	1.36%	8.92%	7.10%	5.68%	4.32%	3.23%	2.05%
公平さ	2.98%	2.14%	1.39%	0.77%	1.40%	1.82%	3.38%	2.80%	1.68%	1.45%	1.00%	0.75%
栄養価	14.08%	7.67%	9.98%	5.55%	4.44%	1.98%	13.74%	5.09%	8.80%	3.88%	4.64%	2.42%
風味	10.83%	5.18%	11.01%	7.73%	4.36%	2.54%	17.98%	11.23%	8.35%	4.63%	5.62%	3.93%
利便性	6.20%	5.44%	4.84%	3.35%	2.80%	1.34%	4.36%	2.70%	2.88%	1.82%	1.55%	0.82%
見栄え	7.70%	8.48%	3.75%	2.57%	2.69%	3.02%	4.87%	3.66%	2.74%	2.28%	1.42%	1.42%
価格	20.50%	8.77%	41.32%	5.80%	68.34%	11.31%	7.71%	4.75%	8.02%	6.82%	3.90%	3.37%
動物福祉	1.81%	0.77%	1.17%	0.52%	0.62%	0.35%	2.13%	1.08%	1.40%	0.76%	0.78%	0.44%
目新しさ	1.58%	0.51%	1.07%	0.31%	0.59%	0.30%	1.68%	0.51%	1.07%	0.36%	0.64%	0.23%
第3回 2021年3月 人数	クラスター1 359(21.6%)		クラスター2 173(10.4%)		クラスター3 121(7.3%)		クラスター4 451(27.1%)		クラスター5 312(18.7%)		クラスター6 249(15.0%)	
自然さ	9.19%	6.76%	4.00%	2.61%	2.64%	1.89%	6.80%	5.25%	5.44%	3.70%	3.65%	2.47%
安全性	15.46%	7.07%	19.16%	9.54%	11.23%	5.84%	39.75%	9.64%	60.86%	5.68%	76.08%	7.02%
環境への影響	5.32%	2.23%	2.51%	1.04%	1.82%	1.12%	3.26%	1.43%	2.34%	1.05%	1.53%	0.74%
産地	9.98%	6.78%	4.09%	2.72%	2.92%	2.23%	6.60%	4.98%	5.03%	3.27%	2.86%	1.84%
公平さ	3.16%	1.89%	1.40%	0.71%	1.01%	0.69%	1.85%	1.20%	1.22%	0.82%	0.83%	0.52%
栄養価	14.91%	7.56%	8.92%	5.30%	5.52%	2.95%	10.14%	5.48%	7.02%	3.45%	4.70%	2.64%
風味	13.91%	7.93%	8.51%	5.53%	5.26%	3.12%	9.51%	5.36%	6.04%	3.17%	3.78%	2.20%
利便性	6.13%	4.77%	4.46%	3.67%	3.01%	3.05%	3.80%	3.13%	2.54%	1.82%	1.42%	1.14%
見栄え	7.04%	7.16%	3.59%	3.46%	1.84%	1.67%	3.11%	3.33%	1.58%	1.41%	1.07%	1.03%
価格	10.47%	7.45%	41.15%	6.70%	63.23%	8.76%	12.38%	9.53%	5.96%	4.63%	2.78%	2.55%
動物福祉	2.82%	1.15%	1.40%	0.61%	0.96%	0.59%	1.79%	0.78%	1.25%	0.56%	0.84%	0.42%
目新しさ	1.60%	0.50%	0.82%	0.29%	0.57%	0.27%	1.02%	0.37%	0.72%	0.25%	0.47%	0.19%

出所) 推定結果より筆者作成。

ることができる。本分析では個人レベルの SP の変化をみるための多項ロジットモデルを、パラメータが正規分布をとるランダムパラメータロジットモデル (RPL) によって推定することとした。個人レベルの SP については、各項目の大きさに基づいて階層化クラスター分析を行い、その上で SP の分布、すなわちどのような SP をもつ人がどの時期にどれくらいいたのかを推定した。クラスター分析にあたってはウォード連結法を用いた。

本分析は、2020 年 1 月の WEB 調査 (以下では第 1 回調査)、2020 年 11 月の WEB 調査 (以下では第 2 回調査) で得られたデータに、別途 2021 年 3 月末に行った WEB 調査 (以下では第 3 回調査) のデータを加えて実施した。それぞれの調査で共通して調査を行った東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県 の 1 都 3 県に在住するモニターの回答を抽出して分析に利用した。サンプル数は、それぞれ 427 人、296 人、1665 人となった。

アンケートでは BWS 形式の質問を行い、Food Values の価値項目について 4 項目ずつ提示し、そのなかで食品を購入する際に最も必要なことと最も不要なことを選択する質問を行った。その際に用いる項目は Lusk and Briggeman (2009) が作成した 11 の Food Value 項目に改良を加えた Bazzani et al. (2018) による 12 の Food Value 項目を使用した。価値項目は①自然さ②安全性③環境への影響④産地⑤公平さ⑥栄養価⑦風味⑧利便性⑨見栄え⑩価格⑪動物福祉⑫目新しさである。

RPL の推定結果を利用して個人の項目ごとの SP を求め、その結果の階層的クラスター分析を行って 6 つのクラスターを見出した。表 2 には、それぞれのクラスターについて、①から⑫までの食の価値項目ごとの SP の平均値と標準偏差と、クラスターごとの人数比率をまとめた。

分析結果からは、1) 大まかに調査対象者を分けると価格重視グループ・安全性重視グループ・多様な価値を評価するグループに分けることができること、2) パンデミック発生後に価格重視グループが減少したこと、3) 代わりに増加したのは安全性重視グループであったこと、4) 総体的に最重要視される傾向の強い安全性や価格の SP が低いクラスターの人数比が増加する傾向にあり、特定の価値を極端に重視する傾向は弱まっていることなどが明らかになった。

これらの変化の背景には外食機会の減少と内食用食品の購買機会の増加に伴って、購買する食品の多様な価値を評価する機会が増加したこと、COVID-19 において健康に対する関心が向上したことなどが背景にあると考えられるが、経済の将来動向が見通せない中でも価格重視にシフトする傾向が見られないことは注目に値する。こうした食品に求める価値の変化の要因を分析していくことは、COVID-19 の影響と今後の動向を理解するだけでなく、食品消費行動の背後にあるメカニズムをより深く明らかにしていくことにつながるものと考えられる。

<引用文献>

- 合崎英男 (2017) 「R を利用した Case 1 Best-Worst Scaling の実施手順」『農経論叢』71 : 59-71.
- 安部晃司、北恵実、中谷朋昭、村上智明、伊藤暢宏、中嶋康博 (2021) 「食事準備行動の多様性 - 食の価値認識の観点から -」『フードシステム研究』27(4)、286-291.
https://doi.org/10.5874/jfsr.27.4_286
- 生源寺眞一 (2009) 『新版よくわかる食と農のはなし』家の光協会.
- 村上智明、中谷朋昭、伊藤暢宏、安部晃司、北恵実、中嶋康博 (2021) 「COVID-19 パンデミック下で食に求める価値はどのように変化したのか?」『フードシステム研究』28(3)、211-216.
https://doi.org/10.5874/jfsr.21_00012
- Bazzani, C., Gustavsen, G. W., Nayga Jr, R. M., and Rickertsen, K. (2018) A comparative study of food values between the United States and Norway, *European Review of Agricultural Economics* 45(2):239-272. <https://doi.org/10.1093/erae/jbx033>.
- Finn, A., and Louviere, J. J. (1992) Determining the appropriate response to evidence of public concern: the case of food safety, *Journal of Public Policy & Marketing*, 11(2): 12-25. <https://doi.org/10.1177/074391569201100202>.
- Lusk, J. and B. Briggeman (2009) Food Values, *American Journal of Agricultural Economics* 91(1): 184-196. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8276.2008.01175.x>.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中嶋康博	4. 巻 114
2. 論文標題 平成期の食の経済	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 VESTA	6. 最初と最後の頁 30,35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋康博	4. 巻 27
2. 論文標題 平成期の食料政策の課題 - 食料自給率とフードシステム -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フードシステム研究	6. 最初と最後の頁 69,79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5874/jfsr.27.3_69	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中嶋康博	4. 巻 68
2. 論文標題 この混乱期に食のあり方を見つめ直す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 AFCフォーラム	6. 最初と最後の頁 3, 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安部晃司, 北恵実, 中谷朋昭, 村上智明, 伊藤暢宏, 中嶋康博	4. 巻 27
2. 論文標題 食事準備行動の多様性 - 食の価値認識の観点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フードシステム研究	6. 最初と最後の頁 286, 291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5874/jfsr.27.4_286	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中嶋康博	4. 巻 123
2. 論文標題 わが国の食と農 - ウィズコロナの現状とアフターコロナの課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 VESTA	6. 最初と最後の頁 28, 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上智明、中谷朋昭、伊藤暢宏、安部晃司、北恵実、中嶋康博	4. 巻 28
2. 論文標題 COVID-19パンデミック下で食に求める価値はどのように変化したのか？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フードシステム研究	6. 最初と最後の頁 211, 216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5874/jfsr.21_00012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 安部晃司、北恵実、中谷朋昭、村上智明、伊藤暢宏、中嶋康博
2. 発表標題 食事準備にかかる手間と食の価値認識 - 大規模データによる分類とBest-Worst Scalingによる比較 -
3. 学会等名 日本フードシステム学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村上智明、中谷朋昭、安部晃司、北恵美、伊藤暢宏、中嶋康博
2. 発表標題 COVID-19感染拡大下で食に求める価値はどのように変化したのか？ - Food Valuesによるアプローチ -
3. 学会等名 日本フードシステム学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中谷 朋昭 (NAKATANI Tomoaki)		
研究協力者	村上 智明 (MURAKAMI Tomoaki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------